

2005.11 Vol.6

岐阜県現代陶芸美術館  
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

CERA・PA

セラ・パ

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5  
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101  
<http://www.cpm-gifu.jp/museum>



## 次回開催

# 陶のシルクロード —加藤卓男の陶芸—

明年1月一周忌をむかえる加藤卓男先生を偲んで、岐阜県現代陶芸美術館では、「陶のシルクロード—加藤卓男の陶芸」を開催いたします。そのために、私たちは加藤卓男という陶芸作家の成し遂げたことを、もう一度検証し直しました。その結果は、加藤卓男という作家が広い視野に立って作陶活動を展開したということ、あらためて確認したのです。さらにその広がり、陶芸技術の分野だけでなく、地理的にも、時間的にも大きな広がりを見せていることに気付かされたのです。

この広がりをも多くの方々に実感していただくために、私たちはこの展覧会を加藤卓男作品だけでなく、作家がその手本とした各地の古い作品を展示することを決意しました。それはたとえば、イスラム系の陶器でいえば、青釉、ラスター彩、三彩、ミナイ手であり、さらに中国の唐三彩、日本の奈良三彩などになり、なかには国指定の国宝・重要文化財も含まれます。

イスラム陶器に興味をもち、とくに400年の間だれも復元できなかったラスター彩にたいして、さまざまな研究のすえ、見事にその再現に成功した作家は、さらに正倉院にのこる三彩の復元に取り組みました。この復元は、正倉院にのこる陶磁器の綿密な調査と並行する形で進捗しました。古陶磁の研究者による調査では、それまで正倉院にのこる三彩は、中国製か日本製かの論争が続いていたものを、ろくろの回転から日本製との結論を導き出す画期的な成果をあげていました。それをふまえての復元作業は困難を極めました。これさえもその研究心でやり遂げたのです。結果的にはこれが重要無形文化財保持者（人間国宝）への認定につながっていきました。

この流れを見るときに加藤卓男という作家の存在感が浮かびあがります。それは低火度釉陶への一貫した研究心です。数千年前から世界の陶磁器生産を主導した中国における陶磁器の展開は、高い温度によって溶ける木の灰を主成分とした高火度釉がその中心をなしています。青磁、白磁、染付、五彩などがそうですし、日本においても、この地の志野・織部を始め、多くの焼物が高火度釉によるものです。現在でも、ほとんどの作家は高火度釉を用いており、楽焼をのぞいて、低火度釉を手がける作家はごく少数です。このように定火度釉はあまり一般的ではありませんが、高火度釉の発達がおくれたイスラム諸国や、中国でも墓の副葬品に施す釉などとして、独自に豊かな展開を見せていました。その代表的な例が唐三彩です。ただ低火度釉といっても一様なものではありません。イスラム諸国のものはソーダ分を主成分としたものが多く、中国、日本のものは鉛を主成分としたものが多いのです。このように系統も歴史もちがうものを、長年にわたって研究し続けた作家の努力には頭がさがるばかりです。

イスラム系の陶器にはじまり、正倉院の三彩に至る加藤卓男という作家の歩んできた道程は、正倉院を「シルクロードの終着駅」というように、まさに「陶のシルクロード」そのものなのです。私たちは、古い作品と加藤卓男作品をあわせて展示しますが、それはひとりの現代作家は、古い作品と真剣に向き合い、それをどのようにしてわがものとし、そこになにを加えようとしたのかということ、展覧会をご覧になる方がたに、実際に比較しながら実感していただくと考えたからなのです。加藤卓男という作家は、古い作品をそのまま復元するだけの作家ではありませんでした。古い作品をもとにし、そこに作家のインスピレーションと創造力によって、新たな息吹を吹き込んだのです。それを実際にご覧いただくことこそ、この展覧会のねらいがあるのです。ぜひ多くの方がたにご覧いただきたいと思ひます。

〈館長 榎本徹〉

- 場 所 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI
- 会 期 2006年1月14日(土)～3月26日(日)
- 休 館 日 月曜日(月曜が祝日の場合その翌日)
- 開館時間 午前10時～午後6時(入館は5時30分まで)
- 観 覧 料 一般800円(団体700円)／大学生600円(団体500円)／小中高生無料  
団体は20名以上

### ○展覧会構成 作品数約150点

#### 加藤卓男作品

- ①均窯、油滴天目など ②青釉、ラスター彩
- ③茶陶(志野、瀬戸黒など)④資料(アトリエの再現、愛蔵品のカメラなど)
- その他
- ①イスラム陶器 ②唐三彩、奈良三彩など

### ○関連企画

鼎談「加藤卓男の陶芸」2006年1月14日(土)14:00～16:00

榎本徹(当館館長)、谷一尚(岡山市オリент美術館長)、弓場紀知(京都橘大学教授)

場所 岐阜県現代陶芸美術館プロジェクトルーム

ギャラリートーク 2006年1月22日(日)13:30～15:00

加藤幸兵衛(故・加藤卓男氏長男)〈榎本館長のナビゲーションにより、展示会場を案内〉

### ○一部巡回

岡山市立オリент美術館 2006年4月1日(土)～5月7日(日)



《ラスター彩 駱駝人物文大皿》



《三彩花器「碧い山」》



《ラスター彩人物文鳥首瓶》



《青釉銀華花形花器》



《三彩貼花文?》



《青釉銀華「碑文」》

## 開催中

# 没後二十五年 八木一夫

# Yagi Kazuo A RETROSPECTIVE

2005年10月8日[土]～12月11日[日]

本展覧会は、陶芸の世界に新しい分野を切り開いた異才、八木一夫（1918～1979）の没後25年にあたり、約300点の作品によって、その功績を回顧するものです。

八木一夫は1918年、京都の陶芸家八木一舂の長男として生まれました。小学校の頃は図工の成績が悪かった八木が、卒業後京都市立美術工芸学校の彫刻科に入学したのは、一舂の強い意向によるものだったといいます。

1948年、八木は、鈴木治（おさむ）、山田光等の陶芸家と共に、走泥社と称する集団を結成します。既存の価値観を打ち壊そうとするその活動の中で、1954年、八木は記念碑的作品「ザムザ氏の散歩」を発表しました。ロクロで引き上げた器体を垂直に起こし、陶磁器に本来備わっていると思われていた「用途」をきっぱりと捨てたその作品は、彫刻とも陶芸とも異なる新たなジャンル、「オブジェ焼き」の確立を示すものでした。現代陶芸に大きな位置を占める、表現としての陶芸の原点は、ここにあったのです。

しかし、八木はこの功績に留まることなく、古陶磁で重視される「味」や「景色」を拒否した黒陶の作品、土の特性を生かしたしわ寄せの手法など、その後も次々と新しい試みを発表し続けます。さらに版画やガラスなど陶芸以外の技術にも取り組み、独自の芸術世界を構築していきます。還暦を迎えた1978年の個展では、まさに原点に戻るかのように、自身の代表作を再解釈した作品を発表しましたが、翌年、病に倒れ、帰らぬ人となりました。

ところで、八木にはもう一つ、異なる側面がありました。信楽、三島の茶碗や水指など、いわゆる茶碗という伝統的な陶芸の範疇にありながら、独自の形態を示す作品です。それらを見ると、八木が古来の技術に十分に理解した上で、かつてない表現を探究し、葛藤を繰り返していたように思われるのです。

今回の展覧会は、陶彫や器を作成していた初期から、還暦の個展で発表された最晩年までの多様な作品を網羅し、八木一夫の全貌を明らかにする貴重な機会となるでしょう。陶芸界の枠を超えて幅広い反響を呼んだ八木の作品は、今日でも、示唆に富み力強い魅力を放っています。

〈学芸員 村山閑〉

- 
- 会 期 2005年10月8日（土）～12月11日（日）
  - 会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーI
  - 開館時間 10：00～18：00（入館は17：30まで）
  - 主 催 岐阜県現代陶芸美術館 日本経済新聞社  
NHK岐阜放送局
  - 観 覧 料 一般800円（団体700円）、大学生600円（団体500円）、  
高校生以下無料 \*（ ）内は20名以上の団体
  - 関連企画 <講演会>  
「父、八木一夫を語る」
  - 講 師 八木明（陶芸家、京都造形大学教授）
  - 日 時 2005年11月19日（土）14：00～15：30
  - 会 場 岐阜県現代陶芸美術館 プロジェクトルーム
  - 参 加 費 無料
  - <ギャラリートーク>  
会期中、毎週日曜日の13：30より、当館学芸員による  
ギャラリートークを行います。
- 



《楽茶盃 未摘花》 1977年 個人蔵



《ザムザ氏の散歩》 1954年 個人蔵



《曲》 1964年 岐阜県現代陶芸美術館蔵

## 次回開催

# 小谷陶磁器研究所展

2005年12月3日[土]～2006年4月16日[日]

小谷陶磁器研究所は、初代安藤知山（知治 1909-1959）が私財を投じて土岐市下石町の小谷に設立した民間の研究施設です。4年程の短い活動でしたが、その存在は、美濃の窯業界ではしばしば語り草となるほど重要なものでした。残念ながら、多くの資料が残されているわけではありませんが、少しでもその活動に触れることができたらの思いから、今回の展覧に到りました。

ではいったい、このような施設を開設するきっかけとなったのは何だったのか。それはひとりの人物の登場によるものようです。窯業地の発展のために若手育成に尽力した日根野作三（1907-1984）の存在です。

第二次世界大戦後、農村の余剰労働力を動員し、外貨獲得の一助として、工芸品生産に向かわせるために、昭和21(1946)年、旧満洲重工業開発会社総裁の鮎義介（日産コンツェルンの創始者）が当時の金額で私財3千万円を投じ、日本農村工業振興会を設立します。しかし、日本の復興に、旧満鉄の資金が使われることに反対したGHQが資金を没収。よって日本農村工業振興会は解散に到りましたが、昭和22(1947)年その陶磁器部門を母体にして日本の風土に根ざした工芸品をつくることを目的に日本陶磁振興会が設立されました。後の丸柴百貨店社長・川崎音三がその指揮を執り、各窯業地に指導者として荒川豊蔵、石黒宗麿、小山富士夫、日根野作三らが派遣されます

日根野は、京都、信楽、四日市、美濃地区を担当することになりました。「…私の日本陶磁振興会の受持ちは、主として美濃地方で、ずっとこれに全力を傾けた。…」と特に美濃地域の指導を精力的に行います。岐阜県陶磁器試験場をはじめ、市之倉の陶光会、上絵付研究会など多くの研究会、工房などバスを乗り継ぎ、集落から集落へと指導にあけくれた日々であったようです。時折、バス停にたつ



日根野が目撃されていますし、日根野のメモからも車中のスケッチなどが見られます。

日根野が残したメモに次のような文章があります。「…土岐市の業者で9人以下の工場は75パーセントと聞き、どうしても土岐市試験場は、これ等の工場試験室にしなければ実勢の成果をあげることはできない。よく観察すると大部分の窯やきは、昔の習慣から脱せず、肉体労働をしている。しかし安いものはどうみても機械生産に変わっていく運命にある。残る75パーセントの土岐市の工場はどうしたらよいか。“特殊な技術とデザイン”による以外にはない。焼物産業の利点は、大企業システムの様な設備がイロイロなくてもやれるという手があるのをもっとよく考えるべきでないか。…」

日根野は単純に窯業界の経済的生産力を高めるための目標を掲げたのではありません。近代化の名のもと安く大量生産できるデザインを目指したのではなく、窯業地の現状を把握し、産地にふさわしい生産方法として、手作りによる技術、デザインの向上を目指したのです。日本陶磁振興会が目標に掲げた、「…日本の風土に根ざした、工芸品づくり…」を実践したのです。そして、指導者を続けながら日根野は良質なクラフト製品の開発のためには、デザイン開発のための研究所が必要だと考えるに到ります。このような日根野の考えに共鳴したのが、土岐市下石にある知山陶苑の初代安藤知山でした。安藤知山は地元多治見工業高等学校を卒業後、炭窯を築いて色釉のやきもの作りに取り組みます。また若くして、日展に入選し、陶芸家として活躍するなど土岐市下石地区窯業界のリーダー的存在でした。

戦後になると陶磁器の原材料、技術にめぐまれた美濃のやきものも、国民の生活に対応する製品の必要に迫られるようになり、安藤知山の「これからのやきものはデザインで勝負する時代になる」との先見により、新しい製品開発に取り組み試行錯誤が続きます。この頃に、日本陶磁振興会の指導者として美濃地域を熱心に回っていた日根野の研究会に安藤は出席し、親交を深めていくのでした。そして、



日根野の理念に賛同し、その実践に取り組むため、「小谷陶磁器研究所」の設立を決めたのです。

昭和 26(1951)年、建物の建設に取り掛かりました。そしてその準備に野坂康起、加藤仁が携わります。2人は研究所開設後も講師として研究生の指導に当たることになります。昭和 27(1952)年に建物は完成。翌年より、小谷陶磁器研究所として、研修生を受け入れます。第1期の研究生は6名。安藤光一、伊藤真司、長田豊七、加藤嘉明、四方国夫、羽柴良一です。

小谷陶磁器研究所は地元窯業に携わる子弟らを高校卒業後に研究生として受け入れていたようです。また彫刻家の子弟や異色の研究生としては、安達瞳子の兄、良昌も在籍していました。研究生以外にも、特待生、知山陶苑のスタッフなども出入りしており、今もって地元の人々に、語り継がれることから、多くの人が行き交い、良質のクラフト製品を生み出そうとの思いが満ちていたことが窺えます。

安藤知山は小谷陶磁器研究所の運営資金として「1ヶ月間これでやりくりせよ」と当時の金額で10万円を手渡していたそうです。しかし研究所は、単に技術修練の場所で終わらずここで作られた製品を、多治見商工会議所などで販売し、原材料の資金や講師の賃金をまかなうようになっていました。

“良質のクラフト製品を生み出そう”地元から窯業界からの期待を一身に受けて、小谷陶磁器研究所は誕生しました。また時代の、戦後復興への強い意志を持った経営者、熱心な指導者、若者らの努力により短い期間ながら多くの人材が生まれました。美濃地域の窯業界において、小谷陶磁器研究所は、美濃クラフト青春期のシンボリック存在なのかもしれません

〈学芸員 高 満律子〉



会 期 2005年12月3日(土)～2006年4月16日(日)  
休 館 日 月曜日(月曜が祝日の場合その翌日)  
開館時間 午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)

観 覧 料 一般320円(団体260円)／大学生210円(団160円)／小中高生無料  
団体は20名以上

○展覧会構成 試作品、写真、資料など。

○関連企画

小谷陶磁研究所のこと

2006年2月5日(日)13:30-15:00

ナビゲーター・榎本徹(当館館長)

野坂康起(陶芸家・山口県萩市在住)

## ■教育普及活動報告

# 特別展「大地のこどもたち」

2005年10月29日[土]～11月27日[日]

当館の展示室に、小学生から高校生までの児童・生徒の作品があふれる、特別展「大地のこどもたち」を開催しました。これまで当館では、夏休みを中心に、収蔵作家を講師にむかえ、作品鑑賞と制作を行うワークショップを毎年実施することや、学校との連携を目的に、美術館職員が直接学校へ出向き、美術科や総合学習の講師として授業にかかわるなど、こどもたちを対象にした事業を積極的に推進して参りました。

こうした取り組みの中から導き出された、こどもたちの生き生きとした造形エネルギーを感じていただこうと、今回、当館のギャラリーⅡに、こどもたちの作品を展示して、その無垢な魅力に迫りました。

展示作品の選定・構成では、学校の授業の中から生まれた作品とするため、岐阜県下の学校へ参加を呼びかけ、応募した学校のこどもたちの学びの姿が共鳴する空間作りをねらいました。さらに、今年度の夏休みに3回実施した、当館のワークショップで誕生した作品もすべて展示いたしました。

また、展覧会実施にあたっては、美術館職員と学校の教員・生徒が力を結集して展覧会実施をめざし、三者で実行委員会を組織して開催についての打ち合わせや、印刷物の発送作業を一緒に行い、美術館と学校とが連携を深めました。

参加校は、神戸町立北小学校、岐阜市立陽南中学校、岐阜県立岐阜盲学校、多治見市立陶都中学校、多治見市立小泉中学校、多治見市立南ヶ丘中学校、岐阜県立東濃養護学校、恵那市立恵那北小学校、恵那市立東野小学校、恵那市立大井第二小学校、恵那市立恵那西中学校、中津川市立第二中学校、中津川市立福岡中学校の13校で、作品出品総



数は966点となりました。

このように、美術館と学校とが互いの特徴を生かし合ったつながりをつくることをねらい、「ひとりひとりのいのち」を作品の共通テーマとしてこの展覧会を実施しました。展示室の中で、こどもたちの“いのちのかがやき”を感じていただけたのなら幸いです。

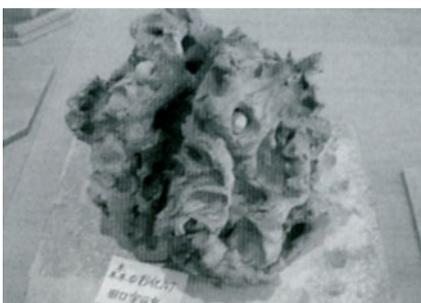
〈学芸員 岩井利美〉

---

■会 期 2005年10月29日(土)～11月27日(日)〈26日間〉  
 ■会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーⅡ  
 ■観 覧 料 無料

---

### 出品作品



## 展覧会スケジュール

	2005.11	2006.1	3	5	7
ギャラリーI	没後25年 八木一夫 10月8日-12月11日	加藤卓男-陶のシルクロード 1月14日-3月26日		金子潤 4月15日-7月9日	20世紀陶芸界の鬼才 加守田章二 7月29日-10月9日
ギャラリーII		小谷陶磁器研究所 12月3日-4月16日		明治の陶芸-宮川香山(仮) 4月18日-9月10日	
		イギリスの現代陶芸 12月3日-4月30日		発光する陶磁器(仮) 5月2日-9月26日	
		大地の輝き オーストラリアとバングラデシュの陶芸 12月3日-4月23日		ものそのもの-陶芸の写実(仮) 4月25日-9月18日	

## 岐阜県現代陶芸美術館 小企画展のご案内

### 展示室 A

#### 小谷陶磁器研究所

KOTANI CERAMIC LABORATORY

ここで育った若者から、多くの美濃クラフトが生みだされました。小谷陶磁器研究所の軌跡をご紹介します。

### 展示室 B

#### イギリスの現代陶芸

Studio Pottery in England

日本にゆかりの深いバーナード・リーチに始まる、イギリスの個人陶芸家の変遷を、オブジェ作品を中心に紹介します。

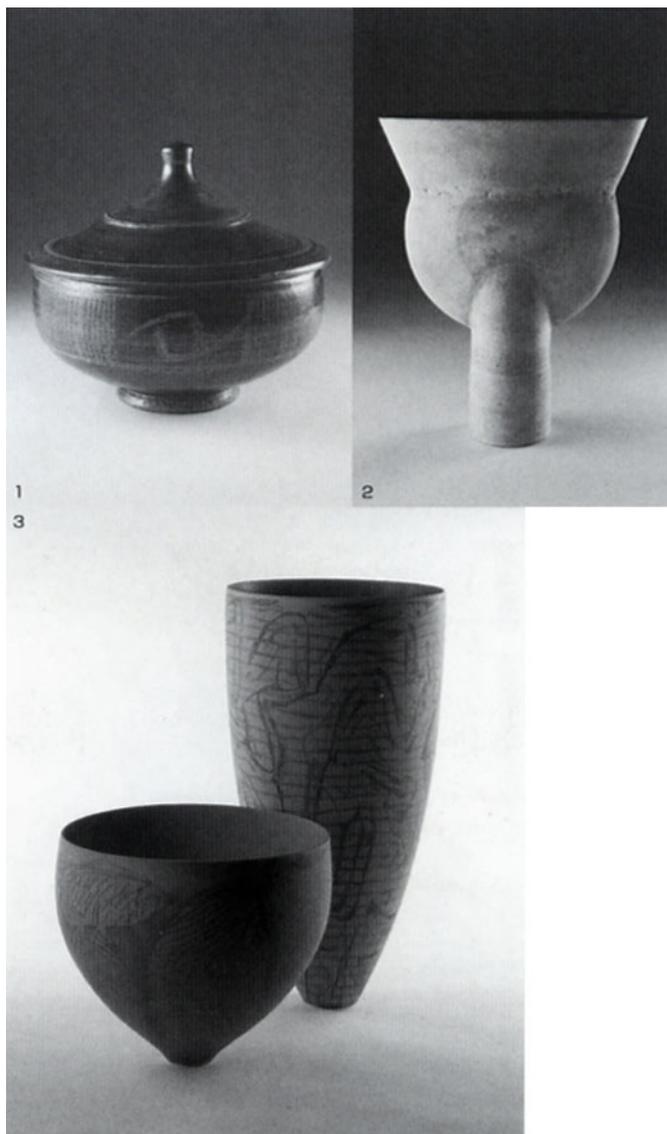
### 展示室 C

#### 大地の輝き～ バングラデシュと オーストラリアの陶芸

Dazzling Earth: Pottery in Bangladesh and Australia

日本ではあまり紹介されることのなかったアジア・オセアニアの陶芸家を、収蔵品から紹介します。

1. バーナード・リーチ 《蓋物》1950～60年代
2. ハンス・コパー 《ポット(ティッスルフォーム)》1972年頃
3. ビビン・ドライスデイル 《ジーナ・バジーナ》2000年  
《タミナトレース》2001年



## 収蔵品紹介

ウォルター・キーラー (Walter Keeler)

塩釉ミルク容器 (1987) 塩釉把手付き皿 (1990) 塩釉節接ぎ水差し (1990)

h34cm×w20cm×d18cm

h19cm×w43cm×d36cm

h50.5cm×w23cm×d15.5cm

まっすぐに上方へ立ち上がった形の水差し。竹の節のような節目をもつ胴部中央より上部では、角度をつけて少し反り返るように注ぎ口となる口縁までぐんと伸びあがる。力強い緊張感のある線がそのフォルムの輪郭を作り上げている。他の2点も、ミルク缶の形をそのまま写したようなミルク容器、そしてチューブから押し出されたような紐状の粘土が把手や縁周りにあしらわれた皿と、いずれも生活と密接な器たちである。

塩釉を用いて焼成されたこれらの作品外側面は、やや青味のある緑色をしており、「オレンジの皮」とも表現される塩釉独特の質感が装飾的な効果を与えている。器たちの内側面の釉薬は黄味をおびた発色をみせ、外側面との色彩にはコントラストがつけられている。フォルムはいずれも簡潔で明快。轆轤の回転から生まれる円形を核として、そこに取り付けられた把手がその簡潔なフォルムにどこかユーモラスな表情を与えている。

ウォルター・キーラーは1942年ロンドンに生まれた。1958年からはロンドンのハロー・スクール・オブ・アート（現ウェストミンスター大学・ハローキャンパス）に学び、ヴィクター・マーグリーとマイケル・カッソンに従事した。在学当時、陶芸コースはなく、数人の陶芸家とキーラーの尽力により同校では陶芸コースが開設された。キーラーは卒業後、その陶芸コースで教鞭を執っている。1965年パッキングムシャーに最初の工房を構えたが、1976年にはウェールズ地方のモンマス近郊に工房を築き、以降はモンマスを活動の拠点としている。ポットや水差し、食器、貯蔵用容器といった器物をテーマに制作を続けている彼の作品にはギリシャ陶芸、ローマン・ガラス、18世紀のスタッフォードシャー陶器やブリキのオイル缶など幅広い影響があるとキーラー自身述べている。

本作品に使われている塩釉は、キーラーの用いる代表的な技法である。塩釉は歴史的にはおそらくドイツのラインラントで誕生したとい

われており、12世紀から14世紀に炆器が発達していくなかで現れたらしい。それらの炆器はワイン用のボトルやビアマグ、保存用容器として利用されていたようだが、この種の器がイギリスで作られるようになったのは17世紀頃からといわれている。当初、塩釉は茶褐色の系統やグレー系の地味な色彩が中心だったが、キーラーはブルーのスリップを使い、鮮やかなイメージを塩釉で作りに出した。

塩釉は揮発釉の一種であり、高温時に窯に投入された食塩が揮発し、無釉の素地と反応して釉薬となる。食塩中のソーダ分と素地とが反応して珪酸ソーダができ、ガラス状の釉薬になる。食塩は900℃くらい

から揮発し、約1200℃で投入すると素地中の珪酸分と化合する。食塩が少ないと透明で光沢のある釉薬になり、食塩が多いと黄味がかかった褐色の独特の不規則な条痕文ができる。

バーナード・リーチが築いた個人作家的陶芸の土壌の上に、ルーシー・リーとハンス・コパーが陶の表現を独自に深化させたイギリスの陶芸は、1980年代に入るときわめて多様な展開を見せた。純粋美術を追い求める流れの一方で、器が本来備えている機能を捉えなおそうとする動きも盛んになった。器ものにこだわった作家のなかでも伝統的なスタイルを直截に受け入れて我が物として消化し、新たな器物の表現を確立したのがウォルター・キーラーである。キーラー



はあくまでも実用性を重要視しながら洗練された形に塩釉を施して、伝統的な手法のなかに無限の可能性を示した。リーチを継承するばかりでなく、形と簡素な釉薬の効果の追求によってまったく新しい美が生み出せるということを体現した彼は、1980年代のイギリス陶芸家にきわめて強い影響を与えた重要な作家の一人であり、塩釉陶芸の第一人者として活躍を続けている。本作品はキーラーが自らのスタイルによって国際的に認知された時期のものであり、彼の作品のなかでも大作の類にはいる作品である。

(学芸員 佐野 素子)

 岐阜県現代陶芸美術館  
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5

tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101

Email museum.1@cpm-gifu.jp

URL <http://www.cpm-gifu.jp/museum>

開館時間

午前10:00～午後6:00(入館は午後5:30まで)

